成長の自己認識が記述する力を伸ばす

生田　聡史
鳥取大学附属中学校　国語科
E-mail: ikuta_st@fuzoku.tottori-u.ac.jp

Satoshi Ikuta (Tottori University Junior High School): **“ Self-awareness of growth develops the writing skills”**

要旨 ― 生徒が文章を「書く」という活動において，自分は「書くこと」が苦手と思い込むことが，その活動を阻害していると考えた。そこで，三年間を通じて「国語」という教科の捉え直しと，「書くこと」が自分を成長させているという実感を育む活動を行う。これら一連の活動が「書く」ことに対する壁を取り除いていくであろうという仮説を立て，三年間の実践を行った。

キーワード ― 書くこと，「国語」の捉え直し，成長

Abstract ― The preconception that “I am not good at writing” may work as an obstacle for the writing activities in the student’s composition. I hypothesized that raise of the sense of high self-esteem in writing may be more important in the Japanese class than raising reading and writing skills themselves. Taking this point into account, I have tried to nurse student’s self-esteem that the “writing activities” develop one’s Japanese competence during the three-year course of the class. I will review the three-year course of the classes and test it if the attempt worked well.

Key words ― writing, more important in the Japanese class, raise of the sense

1. はじめに

国語における「やりくり」の一つとして，その時の語彙で伝えたいことを表現するということが挙げられよう。「話すこと」「書くこと」という表現する部分である。その中にあって，私の今まで出会ってきた生徒たちの多くは記述を嫌がる傾向が強かった。文字（文・文章）を書きたがらないのである。これをいかにして「書ける」ように，できれば「書きたがる」ように変化させようか，というのが私の長年の課題の一つであった。

本年度担当している本校 3 年生は，幸いなことに 3 年間の持ち上がりである。3 年間持ち上がれることを期待して，1 年生の時から「書くこと」に関して取り組んできたことがあるので，今回それらの実践を紹介し，そのまとめを述べたい。

2. 「書きたがらない」を考える

2.1. 「書きたがらない」を変えるために

「書きたがらない」理由は様々考えられるが，私は「書くこと」の達成感や成就感が不足していることが一番の原因ではなかろうかと考えた。つまり，「書くこと」により何らかの修得感，あるいは有用感があれば，「書くこと」への抵抗が減っていくのではないか，という仮説を立てたのである。

2.2. 「書きたがらない」の背景

この生徒たちが入学直後（1 年生の授業開き）にとったアンケート（1 年生 138 人，回答数 138）では，

- 国語が「得意 13%」「どちらかと言えば得意 36%」「どちらかと言えば苦手 45%」「苦手 5%」
- 国語が「好き 39%」「どちらかと言えば好き 37%」「どちらかと言えば嫌い 20%」「嫌い 4%」

という結果であった。全体的に好意的に捉えているにも関わらず，苦手意識があるという結果について，当時の私はアンケート内の記述から，「国語という教科を漢字や読書といった一面的な捉え方をしているから」という分析をしていた。

3. 実践

3.1. 国語の捉え直し

そのような状況下で，国語という教科の思い込みを捉え直させたいと考えた。

「国語という教科に一番似ている教科は何でしょう？」という問いをアンケート後の授業で全クラスに行った。生徒から出た答えは様々であったが「文系だから社会」とか「物語を読むから道徳」といった答えが多かった。

私の準備していた答えは「体育」である。答えの理由は「国語を勉強しなくても日本語を使うことはできる。体育をしなくても走ったり跳んだりできる。それでも国語も体育も小一から中三までずっとやり続ける。なぜなら，体育では，今よりも少し上手に体を動かせるようになるため。国語では，今よりも少し上手に日本語を扱えるようになるため。日本語を上手に扱うとは『読む』『話す・聞く』『書く』ことが今よりレベルアップしていくこと。」というものだ。この理由は賛否あろうかと思われるが，生徒のほとんどは驚きとともに納得もしていたようだ。

この時以降，本生徒たちは現状の自分と比較して何かが少しでも伸びれば国語の力がついてきているという実感が持てる予定であった。

3.2.「書く」活動

国語という教科内で，文章を書く活動を可能な限り多くとった。

・振り返りカード

毎授業の終わりには「振り返りカード」を記入した。1 時間の振り返りを 2 文以上で書かせた。1 分程度の時間内に 50 分を振り返るのは，1 年生当初は相当に困難であったようだ。1 文しか書けなかったり, 2，3 単語しか使えなかったりするものが多かった。

・単元のまとめの文章

授業では，単元のまとめとして文章を書くよう心掛けた。形式は「感想」「鑑賞」「批評」「論説」「随想」「創作」「リライト」等様々である。その単元のまとめとしてふさわしい形式を選択したつもりである。しかしながら当然のように，1 年時はペンが進まず書き切れなかったり未提出であったりする生徒が多くいた。

・夏休み課題作文

授業以外では，夏休みの課題を利用して，様々な作文コンクールなど長文に挑戦した。こちらも一年時は未提出や原稿用紙 1 枚程度の未熟なものが多かった。

なお，表記に関する指導は折に触れ一斉指導として行っていた。

3.3.「書く」活動の評価

上記の活動には評価が必要である。しかし，私が直接生徒に評価を伝えることはほとんどしなかった。自己評価とクラスメイトの評価と，コンクール等主催者が出す結果が評価の多くである。

・振り返りカード

毎日その日のうちに目を通す。検印だけのことが多いが，生徒のコメントに返答することもある。少なくとも表記上の誤りは正す。文章の巧拙には触れない。授業を進めるうえで活かせるコメントを，基本的には匿名で授業中に紹介する。

・単元のまとめの文章

多くの場合，書いた作品をグループで読み合う。グループで評価し合い，コメントを言い合う。グループの代表作品をクラス全体で紹介する。4 クラスを通じて紹介したい作品を全クラスで紹介する。教師の評価は基本的には言わない。

・夏休み課題作文

入賞した作品を，授業の中で紹介する。

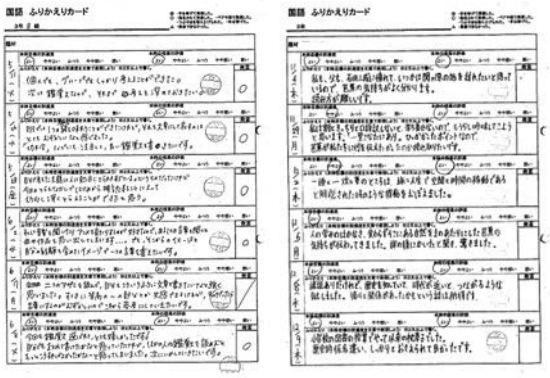
それぞれの作品（文章）に対する，教師の評価は行わないが，折を見て生徒たちには「今書いている文章の質を以前と比較してみて。」とか，「文章を書く速さや分量を以前と比較してみて。」という声掛けを行ってきた。

3.4.「書く」活動の変化

3 年間同じようなスタンスで繰り返し「書く」活動を続けてきた結果，1 年時とは違う様子が表れてきた。

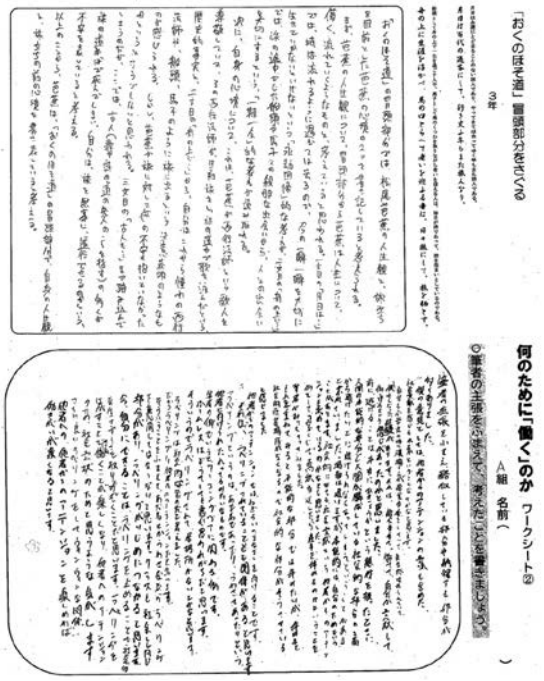
・振り返りカード

わずか 1 分程度で，多くの言葉を書く生徒が増えてきた。特に深く思考した授業の振り返りでは，ちょっとした感想文のようなものまで現れてきた。



・単元のまとめの文章

同じテーマで書いた他者の文章を読むことを楽しみにし，他者が読むことを意識して，真剣に取り組む生徒が増えた。また，種類にもよるが，書き始めるまでの時間が短縮され，書き始めるとペンが止まらないといった様子で書く生徒も増えた。与えられた用紙いっぱいに，さらには枠外(裏や 2 枚目) を使用してまで文章を書く生徒もいる。そして，他者の文章から刺激を受け，自分の書く文章に取り入れようとしたり，自分の語彙力を振り返ったりする生徒が増えた。



・夏休み課題作文

実数を記録していないので，定かではないが，入賞者の人数が，学年が上がるごとに増えている。

・学力テストの記述

上記の「書く」活動には入れていないが，定期テストや模試などの記述問題で，空欄が減ってきた。これは中学 3 年生という受験に向かう姿勢の一つではあろうが，記述問題が多い私の作るテストでは，かなりの文字で埋まっている解答用紙が多い。

4. アンケート

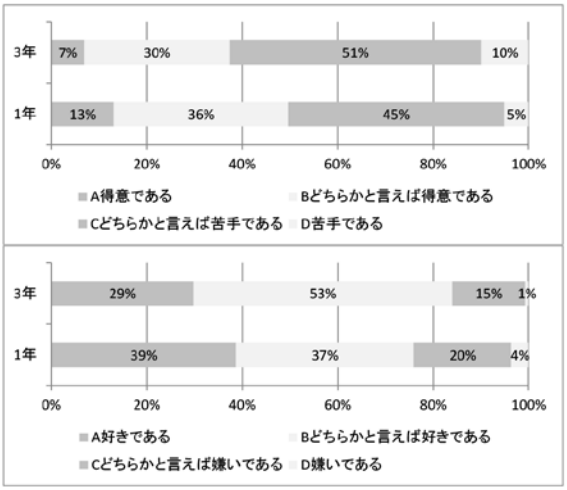
3 年間の実践がおおよそ終了している 2021 年 12 月 20 日前後に， 4 クラスでアンケート調査を行った。1 年時に行った内容を少し 3 年生向けに変更して行った。

(3 年生 136 人，回答数 133)

「苦手意識」と「好き嫌い」

・国語が「得意 7%」「どちらかと言えば得意 30%」「どちらかと言えば苦手 51%」「苦手 10%」

・国語が「好き 29%」「どちらかと言えば好き 53%」「どちらかと言えば嫌い 15%」「嫌い 1%」という結果である。



「苦手意識」に関する結果は，予想していたものとは違うものとなった。記述する質と量が向上すれば，国語に関する苦手意識は減少するであろうと考えていたのだが， 1 年時と比べて苦手意識がより強くなっている。

1 年時「苦手」50%　→　3 年時「苦手」61%

「苦手意識」を持っている生徒の記述を読んでみると，「テストで点がとれないから」というものが多かった。これは納得せざるを得ない理由である。定期テストでは点数という客観的な結果が現れ，それは他者と比較できるし，実際に比較している。平均点や中央値を知れば，さら

にそれらとも比較する。まして，高校受験を控えた 3 年生であればなおさらの感覚であろう。

この結果は大きな課題として捉えなければならい。

一方，「好き嫌い」に関する結果は，予想通りであったと言える。

1 年時「好き」76%　→　3 年時「好き」82%

多くの生徒が苦手意識を持ちつつも，国語は好きな教科だということになる。「好き」な理由を記述から拾い上げると，1 年時と変わらず「本を読むことが好き」というものもあったのだが,「本を読むことが好きになった。」「文章を読んで,深く考えられるようになった。」「筆者や他の人の意見・主張を知り自分の考えを深めることが楽しい」「考えたことを早くまとめられるようになった。」という，自分の変化・成長を実感している回答が多く見られた。

アンケートでは，「3 年間でどのような力がついたと感じているか。(複数回答可)」という設問がある。その結果は，

○文章力……57 人（42.9%）
○読解力……31 人（23.3%）
○漢字……22 人（16.5%）
○脳内漢字変換…14 人（10.5%）
○語彙力……12 人（9.0%）
○深読み……11 人（8.3%）
（10 人以上の回答があったものだけ）となった。

この回答は主観的なものであるが，42.9%の生徒が文章力のレベルアップを感じている。文章力のみでなく，上記のような力が上がったと感じている。（＊「脳内漢字変換」とは，言葉を耳にしたとき頭の中でその言葉にあたる漢字を思いうかべるという行為を，私が呼称しているものである。「脳内漢字変換を続けると，漢字の力が上がるだけでなく，国語全体の力がついていくはずである」と 1 年時の初めの段階で全生徒に伝えていた。3 年間意識して実行してきた生徒が少なくとも 14 人いたことになる。）

また，このアンケートの記述に「成長」「進歩」という言葉を使っている生徒が 12 人（９．０％）いた。けっして多い数字ではないが，自発的にこの言葉を用いたということは，確実に自分の成長を実感している生徒が，少なくとも 12 人いると考えてよいのではなかろうか。

5. 考察

5.1. 成果

客観的な視点での文章力とは言えないが，生徒は，半数近くが文章力の向上を感じている。これは，自分の書く文章を否定的に捉えず，授業内や学級の中で評価されながら成長を感じることから起こる変化だと言える。

また，この変化の前提において，国語という教科は少しずつレベルアップしていくものであるという認識が必要である。実感の伴わない微々たるレベルアップも，年単位の比較をすると実感しやすい。その少しずつの積み上げがほとんどすべての生徒にできていることを知らせることが重要な点であろう。

5.2. 課題

成長の実感は多くの生徒に生じているにも関わらず，苦手意識が減らないことが課題である。これは，4 でも述べているが，テストでの評価が，点数を明らかにし，客観性を持たせるためであろう。今回の取り組みが，基本的には主観的な認識に基づくものであるのに対して，現行の定期テスト等は非常に相性が悪いと言わざるを得ない。

そもそも，個々の国語力は中学 1 年生の段階で多様なレベルに分かれていると考えられる。もっと低年齢で考えても，就学時の段階でさえそれまでの生活経験などを通じて国語力にかなりの差が生じているであろう。その児童生徒の国語力を一律のレベルにしようというところに歪んだ力が加わり，「好きにはなれるが苦手」という歪みを生じさせるのではなかろうか。

国語において，生徒が主体的に学習に取り組むためには，現行の一般的とされている評価の在り方も考え直さなければならないのではないかと考えている。

5.3. 追記

なお，今回のアンケートにおいて，「国語と似ている教科は体育」という 1 年時の話を覚えていて記述していた生徒が 6 人いた。

6 人しかいなかったと言うべきであろうか。